

# 近代語の標章

—— デアル体の發生と展開 ——

杉本つとむ

(オランダは) 文章を飾るなど云ことなき質樸なる風俗にて  
実地を踏み、事の簡径なるを先ぎとする国俗ゆへに、常話も  
書籍に著すことも同様にて、別に文章の辞と云ものなし。

—— 大槻玄沢・蘭学階梯 ——

蘭学者と翻訳 蘭学者と翻訳語(近代日本語)との関連につ  
ては、四つ五つ調査、意見をまとめて発表した。彼らがどのよう  
な態度と方法で翻訳にとりかかったかについて、文典と辞典の両  
方から考察しておいた。わが国最初の翻訳書といわれる「解体新  
書」の翻訳に関係のある杉田玄白も「蘭学事始」や「和蘭医事問  
答」の中で、翻訳・漢文・雅語・俗語についていろいろ感じると  
ころを述べている。蘭学者のほとんどが——少くとも翻訳の経験  
あるものは——蘭文・蘭語のよってくるところを、彼らの入実測  
窮理Vの近代科学精神に求めている。はじめにあげた玄沢のこと  
ばはその典型としてよからう。彼らが、漢文体や文語体から脱  
却して口語体に近い文章体を用い、いわゆる翻訳体の口語的文章

を創始するようになったのも当然のことであった。そうした点か  
らまず文法書の方で、その実践を具体的に示すようになったのは、  
藤林普山の「和蘭語法解」(文化九年序)であろう。例えば次のよう  
にである。

○ Zij kennen hun ambagt wel. 彼等ノ官職ヲ能ク  
知テイル

○ Wanneer jijt gij dit londen verrokken? 汝ハイ  
ツ「ロンドン」ヨリ発足シタ

同じ著者が「蘭学選」の標式十記でA・・・? !Vなどの  
用法をあげ、西欧の文章における論理性を強調しているのと深い  
つながりがある。

また新しく天理図書館でみることのできた資料「和蘭屬文錦囊  
抄」(文化十年)にもつぎのような文例がある。<sup>(1)</sup>

○ hij heefs alle morgen eenen xensterkende middeem  
in genoomen. 彼が毎朝一二の強壯劑<sup>(1)</sup>お内服した。

○ ik zal daan alle morgen von spreken. 我が其に付

て毎朝物言であらう。

○ de maan is de laatste planeet. 月は尤も下き曜である。

訳文に入るのであるVのデアル体が出ている点は十分注意を要しよう。全体に口語調の見えるのも後述の「訳和蘭文語」や「道訳法爾馬」の文体にきわめて近いものである。これは長崎通詞・吉雄如淵の口授を塾生の筆記したものとことわっているように、長崎通詞から発生したデアル体のうちで比較的早いものであり、デアル体の統出する「道訳法爾馬」(同書は長崎通詞が参加してつくったもの)と深い関係のあることが知られて貴重である。口語体あるいは俗語体の翻訳文が出現したことは、ただ訳者の学識などによるものではない。少くとも、西洋の思想、その学問の本質と態度を完全とまでいかなくても、真剣にうけとった上で、彼らの主張を具体化するものとして、考えだした文体であったことも確かである。かなりコトバとそれが表現する実際の概念なり内容なりの把握に努力していったようである。

すこし時代も下り、外国人のことばであるが、日本での聖書翻訳に中心的活動をしたS・R・ブラウン博士のつぎのことばが味わい深く、蘭学者の蘭文翻訳の態度・意見とも共通するものがあるろうかと思う。すなわち、

元来、支那や日本に於ては、書物はただ学者の読むものであるとしてあるが、神の言葉たる聖書は学者だけが読むべきものでは決してない。誰でも読めなくてはならぬ。故に如何なる日本人も自由に読みうる様に翻訳すべきである。

さてここでもう一つ資料をあけておく。それは中津藩主・奥平昌高の「蘭語訳撰」(文化十年<sup>(1803)</sup>)である。大名の手になるものとはい

え、決して例の珍器珍書をもてあそぶ趣味的なものではなく、学問的にもかなり高く評価されるべきものと信ずる(同書の考察については別論を参照されたい)。例文を示すとつぎのようなものである。

○ De deur zal open doen. 戸ヲ開ケルデアラウ。

○ De deur zonde opengedaan. 戸ヲ開ケル咎デアッタ。

○ Was is dat. 夫ハ何デユザル。

○ Dat is duur. 夫ハ高直ジヤ。

△△であるVはみえないが、デアラウ、デアッタなどがあり、他のことから類推するとデアルも用いられていたと思われる。

こうしたものがさらに大庭雪斎の「訳和蘭文語」(安政五年<sup>(1857)</sup>)あたりになるとつぎのようにデアル体がごくあたりまえのものとしてみられる。すなわち、

○ Pieter is een broye jongen. 「ピイテルハ良実ノ書生デアル」  
人名 フル 良実、書生

○ gezondheid is de grooter schat dav rijkdom. 「健康ハ富ヨリ大ナル宝デアル」\*原文は二行  
健康、富

神ハ、アネ 造物主デ 君上デ 及ビ 法則者ヲ  
god is de schepper opperheer en wegter van den  
人ヲ、ソレヲアツクン故ニ 動ヲ、 人ヲ、ソノ神ハ  
mensch het is derhalve de pigt van dezen, deseifs  
命令ヲ 「サ、 衆ヲ  
bevelen op te valgen. 「神ハ造物主デアル君上デア  
リ及ビ法則者デアルソレ故ニソノ神ノ命令ヲ継クコガソ

レガソレガ人民ノ動デアル

雪斎の言語観、文章観は既に発表したものでその方にゆずることとするが、かなりの準備と彼我文章の得失に思いをいたしての翻訳だったと思われる。デアル体の発生は頗る当然なものであったといつてもよからう。一方辞典の方では「道訳法爾馬」(文化十三年)が注意される。本書の緒言によって翻訳の方法と態度は了解できるのであるが、A鄙俚の俗語方言を以て訳すVとしたのが基本であり、その間に次のような翻訳文がみられるのである。

○彼人はまだ学問に入はなである。○夫れは彼女の恋ひ人である。○為替手形の払ひ時の仕切りは来る「ウエーキ」である。○彼等はまだ初恋である。\*原文省略

いわゆるデアル体の続出である。「道訳法爾馬」はいうまでもなく商館長ズーフを中心に長崎通詞たちが協力してつくりあげたものである。上掲の大庭雪斎とともに江戸でなく九州、あるいは長崎通詞に関係ある人の翻訳にデアル体がおこなわれたことは注意してよからう。もっとも安政頃になると、オランダ語の文典もかなり広まり、全国的に学習者も増加してきた。別論でも示したとおり、江戸出版の「蘭語独案内」にはすでにデアル体がいわれている。江戸へも長崎の波は烈しくおしよせ、それとともにデアル体も一つの標準的翻訳文章として紹介習得されてきたと思われる。「道訳法爾馬」を受けて江戸で出版された「和蘭字彙」(安政五年)も——両者が殆んど同一なので論外ではあるが——デアル体を踏襲している。さらに竹内宗賢訳「和文典読法」(三年五八)をあげておきたい。同書の書誌的な解説は別の機にゆずる。

ただ竹内氏が東都、すなわち江戸であることに注意しておいてよからう。\*オランダ語を原語なしのかたかなで示し、その下に訳をふす。

△セイン デイ 此物デアル

△フロウエレキ セイン 女性デアル(十一丁ウ)

○中姓デ有ル所ノ審断ト云字カ取除ラレテアル(十四オ)

\*オランダ語音の表記は省略してつきにあげる。

○最一般ナルモノデアル(二十オ)

○精密ナルコヲ与ヘルコノ為ニ要用デアル(三十ウ)

○別々ニ精ク話デアロフ(五オ)

○其事ガ要用ニアルデアロウ(二・九ウ)

二

蘭文から英文へ 以上蘭文翻訳とデアル体の発生についてごく簡単に素描したが、蘭学から英学への移行につれて、このデアル体もまた忠実に継承されていったと思われる。大体において、安政一万年延一丈久一慶応の間約十年に英語関係のものが編集あるいは刊行され、明治五六年までに意外な盛況をもたらすことになる。辞典では「道訳法爾馬」↓「和蘭字彙」↓「文久英和袖珍辞書」↓「二年英和袖珍辞書」のような流れをたどる。特に「文久英和袖珍辞書」は現代の英語・英文の基礎を築いた辞書として忘れられないものである。その他に単語編、当用英語集という類のものも数多く出ている。これらの基になった資料は私の調べた限り、いろいろ書名に異同はあるものの、その第一は、万延

元年に刊行された「英語箋」(石橋政方著)であると思われる(後述)。この「英語箋」は日本英学草分けの重大な一冊であることは確かであろう。しかもさかのぼれば、森島中良の「英語箋」(寛政一七)であり、さらにさかのぼれば、その原本はメドハーストの英和和英字彙である。その他、特に熟語を集めた辞典、「英文熟語集」(小幡篤次郎、甚三郎編、慶応四年一八六八)などもあり、英学は急ピッチで学習されていたことがわかる。

さて英学関係のものではまず第一に、「文久英和袖珍辞書」がある。これには当然のことながらデアル体がみえる。

conversational, s. as: to be good ~. エク談話スル人デア  
ン。 ○ It is at your discretion. 汝ハ其ソノ師匠デア

ル。(上掲の「英文熟語集」にも *it ought*. 其妻ハ当然デア  
ルVのようにデアル体がみえる。ただし数は多くはない)

「和蘭字彙」を範に仰いで編集したものであるからデアル体のでてくるのはきわめて当然であろう。ただし翻訳に關係している人々が、たとえ江戸に在住しても、もとをただと九州(長崎や中津など)の人であることは一応注意しておいてよからうと思う。△開成所Vがこの種英学や辞書編集のセンターであるが、ここにいた人々は勝海舟のように江戸のものもいることはいはるが、多く語学方面では九州の人々であった。「英和袖珍辞書」の編集主任ともいへべき堀達之助も、もとは長崎の和蘭通詞であり、「英文熟語集」の著者の小幡氏も中津藩士であった。こういう点から長崎通詞などが幕末、開国という事勢の激変とともに江戸へ居移すようになってきたわけである。

以上蘭学から英学へ、長崎から江戸へと近代日本の舞台が移動するにつれ、新しい使命と表現を担って、△デアル体Vが近代日本語の中心的位置に座する可能性を示してみた。小論では一おう辞書類を除いて、「英語箋」の類を資料に、さらに幕末から明治初年にかけて、△デアル体Vの普及進展のあとを示してみたいと思う。デアル体の所在とその普及を考えていくことは、とりもなおさず近代日本語史の重大な一断面であり、あらゆる意味で転換期に立った日本語の近代化を示す標章であろうと思う。

### 三

英学とデアル体 「英語箋」について一言ふれておく。同名のもの  
のが二種あり、ともに原本はメ氏の英和和英語彙であるが、一  
本はメ氏のものと同接関係のあるもの(以下A本)、もう一本は  
メ氏のもの森島中良の手によって改編して「英語箋」としたも  
のと直接関係のあるもの(以下B本)——この二つに分かれる。  
A本は一名米語箋とあり、前編(二冊、和太、安政四年一八五七)と後編(四  
冊、和太、文久三年一八六三)からなり、仏語の祖として名高い村上英俊に  
よって校定編述されたもの。扉にメ氏の語彙と同じ書名が刻まれ  
ている。いわば、わが国最初の英和々英辞書である。それまで英  
蘭とか蘭英は多少とも手に入ったが、蘭語を知らねば英語もでき  
ないわけで、その点本書によって日本語から直接英語、英語から  
直接に日本語を学ぶことができるようになったものである。英和  
では *An even ten* 一十、和英では *ハイー the gall* Vの  
ように原書にかなり忠実に翻刻している。しかし訳語が主であり、

その訳語も獨創性に乏しい(これはメ氏のそれを忠実に受けついでたのだから当然かも知れない)。誤訳—— $\wedge$  pine | svogi — スギVの類など——もあり、ただ $\wedge$  letter | tegami | 手紙, century | frakthen | 年など多少訳語に注意されるものもある。一方B本は上・下二冊本、自琢齋蔵版、万延辛酉蔵(万延二年)刻とあるもので、自叙の最後に $\wedge$ 時万延辛酉蔵春正月於東武横浜公舎崎陽石橋政方謹識 中山武和校正Vとみえる。すくなくとも万延元年にはできあがっていたものであろう。さらに自叙には、石橋氏が弱冠から英語を習い、今童蒙初学の為にこれを編述したこと。および森島氏の英語箋にならって天文、地理と語を集め英語を学ぶ階梯とした由を語っている。ちなみに石橋政方は明治文学硯友社・社友の一人石橋思案の父君である。

本書はA本と違って下巻(巻之二ともある)に $\wedge$ 言語、日用語法会話一、会話二Vという項目があり、訳文につきのようなものがある。

- it is true. 其レハ誠デアル。 ○ What weather is it? 何ナル天気デアルカ。 ○ it is cloudy. 雲気ナル天気デアル。 ○ this is a good one try it. 是好キ筆デアル是ヲ試ミヨ。 ○ it is the great of the city. 其レハ市中ノ最大ナル家デアル。

かたかなで発音を示し、それもオランダ語風のそれに近いが、デアル体はかくも多く訳文に出てきている。この「英語箋」は明治五年に改正増補されて出版されている。序に $\wedge$ 欄ニ石橋氏著ス所ノ英語箋アリ蓋シ森島氏ノ英語箋ニ比スル所ニテ泰西学者ノ机

ニ一日モ欠クベカラザル書ナリ……玆ニ嶋桂潭兄其誤謬スル者ヲ校正シ且巻尾ニ加フルニ地球中有名ノ国都島号并ニ詞品區別点符号等ヲ以テシ梓功成ル名ケテ増補英語箋ト云頗ル善本ト謂フヘシ希クハ洋籍ニ登竜セント欲スルノ徒之ヲ座右ニ置キ親徐シテ可ナラン歟Vとある。 $\wedge$ 石橋政方訂 便静居主人校訂 万笈閣発兌Vとあって、政方の弟子嶋桂潭||便静居主人の増補したものである。初版から約十年経過しているわけである。訳文を示してみる(初版と同一のものではない)。

- It is very fine weather. 甚々晴天デアル。 he will return soon. 彼ノ直キニ帰ル有フ。 ○ his daughter is very agreeable and already of age. 其娘ハ愛ラシクテ最早年頃デアル。 \* 原文を省略し訳文のみ示す。
- 如何成天気デアルカ、雲気ナル天気デアル。 ○ 少々冷気デアル。 ○ 烈風デアル。 ○ 彼ハ此ノ娘ト夫婦ニナルデアラウ。 ○ ビーサンハ大ヒニ男子ノ風アル娘デアル。 ○ 彼 (she) ハ心ノ正シキ娘デアル。 ○ 彼 (she) ハ美人デアル。 ○ 最早遅シ引換ノ刻限デアル。 ○ ハヤ争ヒモ是限ニ為リサウナ者デアル。

いうまでもなく翻訳体の多少ぎこちない訳文であり、「道訳法兩馬」以来の訳文体と全く共通しているものである。しかし蘭学から英学への転換においてかくもデアル体がはなはしく登場してきたことはやがてくる近代文学の言文一致体にもどれほど深い影響を与えたことであろうか。ここではじめに示した $\wedge$ 自叙Vのことが思われる。すなわち $\wedge$ 崎陽石橋政方Vであり $\wedge$ 東武横

浜公舎ニ於テVである。というのはデアル体を島村抱月は『浜言葉』であると指摘していることと関連がある。(4)やはりデアル体はかつて私の予想したとおり長崎から横浜へと通詞の移住とともに招来されたもの——いわば蘭文翻訳によって生まれたものの末流だったらしいことである。さらに石橋政方などによりその種が横浜にまかれたことも意義深い。子の思案は横浜で生れ、尾崎紅葉らと硯友社をおこして「我葉多文庫」を発行したことで有名である。小説の文章体として、文学表現の一つとしてデアル体を採用した紅葉——そのはじめの「二人女房」(明治二十四年の新文体にも何か影響を及ぼしているのではあるまいか(二葉亭四迷も英語を学んでいたわけであるから、「あひびき」などの訳文とデアル体も関連があるかもしれない)。思案から直接その父のことを聞いたり、その訳文のデアル体についても聞いたであろう。その上紅葉らが大学予備門で学習したリーダーや翻訳書にもデアル体がいいられていたはずである。——あれこれ考えると「英語箋」のもつ史的意義は決して小さく評価できないものと思われる。

ここで「英語箋」に類似するものを二、三紹介してデアル体をさらに追求してみよう。その一つに「官当用英語集」(安田為政、明治二年)がある。はじめに序のようなものがある。すなわち、つぎのようである。

一、今世ニ行ル処ノ英語箋最モ多シ然ルニ横文字本邦ノ仮名付ハ正格ナレバ師ニツキ学バザレバ言ノ遣ヒ方繁多ニシテ通シガタキ語亦多シ……譬バ英語ニ国ノコトヲ「コンテイリー」ト仮名付アレバ「カンヅレ」ト言ヒ或ハ紙ノコトヲ「ペー

プル」ト仮名付エバ「ペーパー」ト言ズンハ通ゼズ……皇朝人ト外国人トハ音ノチガヒ亦ハ言ノ伸縮アル故学ザレハ通シガタキ語多シ、コノ語ハ英人常ニ言拔フ言ヲ其儘ニ記スユヘニ通スルコト安シコレ童蒙ヲ導ク一助トモナランコトヲ希ノミ。つぎに同書から訳文を示してみよう(原語の英語はなくて、かたかなで英文を示している)。

○イット イス ノット トルー、それはまことであらぬ。其レハ誠デアラス。○シユールソーイストルー、じつにまことである。実ニ誠デアル。○イット イス フォールス、それはいつわりである。其レハ偽テアル。○ホーエール コーカンズレ子ム、あなたのくにはどこである。汝ノ国ハ何処。○ツディ イス ウエリ ウエーゾル。こんにちははなはだよいてんきである。今日ハ甚晴天テアル。○ウエリ ベット ウインド。はなはだあしきかぜである。甚タ悪キ風テアル。右のようにオランダ語風の発音と耳から聞いた英語の混交であるが、訳文のデアル体もかなり板についてくる。もっともハミーマリケン わたくしあめりか 我レ亜米利加/アイハウスカム わたくしのたくへござれ 我家ニ米レVのようにビジョン・イングリッシュならぬ怪しげな英語も多く、それはそれとして初期の日本における英語状況を知る資料にもなる。しかし、デアルが実例において、いはば圧倒的多数であることも、デアル体普及の第一歩とみてよからう。

つぎに「英学辞訓一名スベリシテ独習」(明治六年からすこし実例を示してみよう)。

○ Test is a decisive trial. || テストハ決定ノ吟味  
 一、<sup>有ル</sup> <sup>有ル</sup> 決定ノ <sup>吟味</sup> <sup>有ル</sup>

○ A pony is a very little horse. || ポニーが甚ダ少キ馬  
 デアル。 \* 発音のかたみな、各語の語釈一、二の  
 番号などすべて省略しは私私、以下同じ

○ Vipers are bad snakes. || バイバールスガ悪キ蛇デア  
 。

○ I will kiss the babe on tis cheek. || 私ガ彼ノ頬ニライ  
 テ子供ヲ接吻スルデアラフ。

右は特に編集の主旨説明がみえないが、一種の英語入門書としての性格が考えられる。前者よりよほど英語発音になっている。さらにこれと同年のものに、「挿訳英和用文章」がある。検討してみよう。まず凡例の一部分にこうみえる。

○ 此書ハ英国ノ尺牘書数部中ヨリ文短ニシテ意解シ易キ日用ノ手簡数章ヲ挙ゲ之ヲ和訳スルニ我ガ日用書翰ノ俗文跡ヲ以テシ児童ノ輩ヲシテ彼我ノ文章ヲ照准シ略其体裁ヲ知ラシム

○ 横文ニ音読ヲ記シ挿訳ヲ施シ数字ヲ以テ倒語ノ符号ヲ加フ者ハ是專ラ初学輩ノ為ニ謀ル者ナリ音読ヲ読ムハ横文ノ語音ヲ知リ挿訳ヲ見レハ其直訳ヲ知り数字ノ符号ニ随ヘハ其倒読ヲ知ル故ニ此三者ニ因テ刻苦勉勵セハ師ナクシテ横文ヲ読ムノ階梯ヲ得ニ至ン

○ 此書横文全ク原本ニ從フカ故ニ訳文往々我邦俗文ノ状態ニ匹似セザル者アリ是專ラ彼国ノ文章跡ヲ知ラシムルカ故ニ敢テ語句ヲ変換セス然レ氏文情彼我大ニ懸隔スル者ハ不得止シテ稀ニ一文章中一二語ヲ添削変換スル者アリ而シテ校訂再

次猶恐ラクハ謬誤アラントヲ看客之ヲ正セバ余之幸ナリ  
 \* ルビは必要以外省略した。

本書も前書と同じく大分英語らしくなっている点がある。どちらかという当時ものにはオランダ語風の発音ルビがふつうであるから両者は英語を直接学んだ人の手になったものである。本書は凡例でことわるように従来の訳書の体裁を踏襲して、かたかなで個々の単語の発音を示し、漢文訓読風に一、二などの番号をつけて訳法を示している。文体も凡例に記するように一おう俗文体をとった由である。つぎに実例を二三示してみる（英文に対応する候文の和文書簡文をあげてあるが、小論では翻訳語文を考察する性質上、候文の方は省略することにした）。

○ ...which I remember to have been a work...  
 夫 <sup>何</sup> <sup>ヲ</sup> <sup>我</sup> <sup>ノ</sup> <sup>覚</sup> <sup>エ</sup> <sup>ル</sup> <sup>事</sup> <sup>ト</sup> <sup>シ</sup> <sup>テ</sup> <sup>夫</sup> <sup>レ</sup> <sup>ハ</sup> <sup>昔</sup> <sup>ニ</sup> <sup>有</sup> <sup>リ</sup> <sup>キ</sup> <sup>事</sup> <sup>ナ</sup> <sup>リ</sup>  
 \* 仕舞テアツタコトノ我カ覚エル所ノ……（読み下し文は筆者による。印刷上表記の体裁は原文とやや異なる。以下同じ）

○ ...I will take great care.....  
 我 <sup>ハ</sup> <sup>大</sup> <sup>ナル</sup> <sup>取</sup> <sup>ル</sup> <sup>事</sup> <sup>ヲ</sup> <sup>大</sup> <sup>ニ</sup> <sup>心</sup> <sup>ガ</sup> <sup>キ</sup> <sup>テ</sup> <sup>取</sup> <sup>ル</sup> <sup>事</sup> <sup>ト</sup> <sup>シ</sup> <sup>テ</sup>  
 \* 我ハ大ナル心付ケテ取ルテ有フ。

○ I am, sir, your obedient servant.  
 我 <sup>ハ</sup> <sup>シ</sup> <sup>君</sup> <sup>ノ</sup> <sup>忠</sup> <sup>實</sup> <sup>ト</sup> <sup>シ</sup> <sup>テ</sup> <sup>奉</sup> <sup>仕</sup> <sup>ス</sup> <sup>ル</sup> <sup>者</sup> <sup>ナ</sup> <sup>リ</sup>  
 \* 我ハ君ヨ、汝ノ從フタル僕デアル。 \* 以下訳文のみあげる

○ Downe 次ノ木曜日ガ定メラレタル時デアアルコトヲ忘レ為ナ  
 ○ 夫ガ長キ時デアアル。○ 夫ガ左様ニ愚デアアル。

○……利益ノ大ナルモノデ有デアラフ。

○早キ答ガ要スルデ有ラフ。○我ハ汝ヲ見ルベク有ルデ有ラフ。○私ハ亦独逸語ヲ学ベク好ンデアル。

いわゆる直訳の翻訳文章体であるが、今まで考察してきたデアル体と同一線上に並ぶ翻訳文体として評価してよからう。

#### 四

##### 近代語の標章

以上、幕末から明治初年にかけてのデアル体を示してみたが、これが一般的になるまでにはまだいくらか時間が必要だったと思われる。たとえば文久三年（一八六三）刊の「ブラウン・英和俗語文集」あたりでは「*ハゴザリマス*」*ハダ*が「*ハゴ*」にみえるが、デアルを見出すことはできない。同書では「*アリマス*」もごく少いが、会話や対話での丁寧なことば「*かい*」として出てくる。また「蘭英日による買物対話集」(Shopping-Dialogues in Dutch, English and Japanese / published by J. Hoffmann, Japanese Interpreter to the Government of the Dutch east-indies; 1861 London, Hageve // Winkelgesprekken in het Hollandsch, English en Japansch)にも「*ハ夫*」*正味*「*値*」*段*デ有マスカ。白蠟デ有マスカ、*イ*、*エ*生蠟デ有マス。今日ワ幾日デ有マスカ。此人ワ誰デ有マスカ $\checkmark$ などが見えるが、デアル体はない。さらに下って馬場辰猪の「日本文典初歩 (An Elementary Grammar of the Japanese Language)」(明治六年)の「*Japanese and English Exercises*」にもあれほど多数の例文がありな

がらすべて「*ハゴザリマス*」でデアル体はない。外国人のものに

見えないことなど、恐らく耳で聞かれることがなかったか、ごく稀であったのであろう。

ただここで「*ハボン*」の「和英語林集成」(初版・慶応三年)につきのような例文の見えることは一考を要する。すなわち、

De,  $\checkmark$ , post-pas. Kore wa nan de aru, what is this?  
Kami de aru, it is paper.

本書はアメリカ人・*ハボン*の編集にかかると、助力者・岸田吟香と、横浜という土地がら「*ハボン*」はそこで多くの庶民にも接した)のせいかもしれない。また、アストンの「日本語小文典」(A Short Grammar of the Japanese Spoken Language. By W.G. Aston, 2nd ed., 1871)に「*ハデ*」の用法の説明でこうみえる。

De aru is in the vulgar Yedo dialect contracted into da, and de wa into ja. Examples. Uso da. It is a lie. Ija naika. Is it not good, i. e. ~~ga~~ you not satisfied.

果してデアルは江戸の俗語だったか。これは問題になるところである。蘭文翻訳とも考えられるかも知れない。しかしたとえ江戸俗語として存在していたとしても、具体的に用例を捜しだすことはむずかしい(いわゆる推量の型の「*ハ*」であろう(あらま。あらう) $\checkmark$ は古くからかなり一般的にみられる)。少くとも近代語としてデアル体でよばれるデアルは、私がこの小論で考察してきたように蘭語翻訳(一種の人工語というべきもの)に「源泉を求め」る方が妥当するのではなからうか。

上掲アストンの文典にも、「*ハデ*」*ゴザリマス*」*ハダ*は例文に



見えるが、デアル体の文章はみえない。ブラウンのものも同様—  
ここにも蘭文翻訳からの可能性が考えられよう。

しかしともかくデアルやデアラウはこうして次第々に多くの  
人々に学ばれる機会がふえていくのである。前の「英語箋」でも  
そうであったように、八才の童児も英語を学ぶという具合で、日  
本人がちやうど太平洋戦争に敗北した直後のように、積極的に学  
ぶようになっていったわけである。そうした時当然のことながら  
英文と訳文とを一のものにして学習したのであるから、デアル体  
も英語学習族の間には急速な勢いで普及していったことを想像す  
るのに難くないのである。

この間の事情を説明できるものとして、(A)「ウヰル 第三リード  
ル直訳巻」(栗野忠雄訳・明治十七年)と(B)「スウキン 英文典直訳全」(齊  
藤八郎訳・明治二十年)から例文を示してみよう。

(A)○神ハ「イープ」ニ汝ガ為シタ所ノ是ハ何デ有ルカト云イ  
シ (p.6) ○基督<sup>キリスト</sup>ハ汝ノ舟私ノ愛デアル汝ハ温和ナル鳩デア  
ル (p.15) ○足ニ躩アル動物デアル (p.216)

(B)○働詞ハ動作或ハ有様ヲ言頭ス所ノ詞デアル。○善キ書  
物ヲ読ムコトハ有益デアル (p.80) ○「ロングフェルロー」  
ノエヴァンゲリンハ美ナル詩デアル (p.20)

\* (A)・(B)ともくデアルがごくふつうにみえる。右はそのう  
ちの数例をあげただけである。

なおデアルと対応してデスについても考察すべきであったが紙  
数の関係でつぎの機会にゆずることになってしまった。ただ結論  
的にいうとデアルが俗文体として、翻訳文体に急速に広まったと

ほぼ同じころ、デゴザイマス・デアリマスの略語として(そした  
価値評価、心理作用)デスも会話の表現に、はなばなしく登場  
する。しかもそれは翻訳文体に媒介されて一般化しようとした契  
機があったと思われる。(明治五年刊「英和通信」など参照)い  
ずれも新しい時代の、いわば近代日本への志向をめざす新しい表  
現として脚光をあびたわけである。以後両語はまさに近代語の  
標章Vとして、標準的な日本語としての坐をしめ現代まで生きて  
いるのである。(36・8・7)

註1 拙論・和蘭属文錦囊抄その他(解釈69号)参照。

2 拙論・蘭語訳撰その他(解釈6号)参照。

3 拙論・明治以前英人の日本語研究(解釈74・75号)参照。

4 島村抱月・言文一致と敬語(集二巻)。同氏・言文一致論

集(会席上での口演)

5 「浮世床自序」に「唐詩の白髮三千丈。広いに縁て個の

如く。髻<sup>かみ</sup>髪<sup>け</sup>までが長いである」と見て来た様な「国字解Vと

ある。また「刊書寶鑑古称提聞解」(刊行は文政九年秋)に「

笑止ノコトデアル。……雲門ノ如ク斯僧ノ如クテアル。以

前ノ働カ出来ルデアロウ。V「通詩選諺解」(四方山人著・

天明七年)の諺解の部に「茶席茶筵とハ茶屋の事である/会

席をひらくである/角兵衛獅子の事であるVなどがみえ

る。漢籍国字解(口授・一種の翻訳)、説教(仏教)などに

はデアルが用いられていたらしい。いずれも翻訳文体とし

て同質的であるが、蘭文翻訳との関連は後日記述したい。